

郷土を愛する人々の雑誌

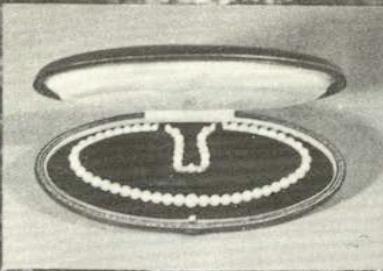
神戸っ子

1962 1周年記念号



Masaru
Nakanishi 62

MONTHLY MAGAZINE KOBEKKO MARCH 1962 NO. 13



100粒の中から5ツ

100粒の真珠の中から
平均して5ツ ミキモト
の名にふさわしいツブよ
りの輝きは こうして選
ばれるのです。



御木本真珠店

神戸店:

神戸国際会館 TEL 22-0062

大阪店:

新大阪ビルディング TEL 361-0220

本店 東京銀座四丁目



これは神戸を愛する人々の手帖です

あなたのくらしに楽しい夢をおくる

神戸を訪れる人にはやさしい道しるべ

これは神戸っ子の心の手帖です



神戸と女性

上野純子さん
(スケート選手)





女性による（第4回）
ヒルマン・エコ・ラン

東京大阪間を最少の燃料で走る競争
実施／5月5・6日 申込期日 4月10日



応募規定／参加ご希望の方は下記
へお問い合わせ下さい
兵庫いすゞモーター
神戸市雲井通4／TEL (22) 4751



目 次

神戸と女性／カメラ・杉尾友士郎	1	24 結婚特集
ずいそう／村という町・小松清	4	25 ウェディングドレス・福富芳美
ずいそう／冬よさようなら・上野純子	9	28 愛の日の装いに
神戸っ子放談／神戸を見直そう・牛尾吉朗	10	31 座談会／神戸ときもの ゲストに岡部伊都子さんを迎えて
連載①問わず語り		34 びんくこーなー (T)
播州人・司馬遼太郎	12	39 ずいそう／二題 青木重雄・鴨居玲
神戸を語る・山崎国雄	14	45 BON SOIR MADAME
私の好きなスター・星空ひかる	17	46 ショート・ショート① かたきうち・陳舜臣
神戸だからえがく夢・藤本義一	18	
神戸を創るトップグループ劇団道化座	20	
花時計・レリーフ・松井高男・和田	22	

表紙・中西勝／写真・杉尾友士郎・米田定蔵／デザイン・橋昭三

すいそう

村という町

小松

清



私は兵庫の算所（さんしよう）町に生れた。日露戦争前のことである。神戸駅から兵庫駅に行く鉄道線路のすぐ南側に私の生れた家があった。生家は米屋だった。線路に沿つて両側に△から△の生け垣がうわっていた。私の家から佐比江町え南一、二丁は庶民的繁華街だった。明治座という古い芝居小屋（劇場）があり、八百屋、魚屋、肉屋、おそらく菜屋、居酒屋がぎっしり軒をなべていた。今のはマーケットそのままの喧騒さだった。そのころの兵庫では、柳原とならんで屈指のさかり場だった。

人々は算所町と呼ばなかつた。それは謂わば表向の名で、通称「村（むら）」と呼ばれていた。古い文献をみると、昔から「村」と呼ばれてきたらしいが、おそらく兵庫の港町の外れにできた新開地だったのではないか。新開地といえば、時代的には、「村」よりも後にできた湊川新聞地は「村」から僅か二、三町のへだたりしかへだたつていなかつた。今までこそ、新聞地は神戸の△浅草△であるが、昔にくらべると大分さびれはてはしたが、私の幼少のころは名のしめすように湊川の河原の面影が到るところに残つていた。湊川河原の埋立工事がはじまつたのは明治三十五年（一九〇二）、

私はまだ物心がついてない二つ、三つの幼児であつた。現在（いま）聚楽館のあるあたりは新橋と呼ばれていて、湊川がまつすぐ南に向けて海に流れこんでいた時分は橋がかかっていたのだろう。ひどく淋しい場所で、夜になると狸がでて、通行人をたぶらかすと語り伝えられていた。私も祖父の膝の上で屢々そんな話をきかされて、おぼえたことを憶えている。じじつ、あのころ狸の類が棲んでいたのは事実らしい。

算所町は、一日中人ごみでごたごたした盛り場だったので、私たち小供の遊び場はしぜん広い河原のある湊川新開地ということになつた。何人が仲間とつれだつて、そこまで出かけて行つた。私はまだ小学校にかよつてない年ごろだった。私の家から眼と鼻のところにある永沢町の線路の踏切りをとおり、兵庫小学校（私の母校。現在も残つてゐる）にまで出るのが二、三分、そこから東え二、三丁も歩くと湊川の河原だつた。途中、弁天の社（やしろ）があり、そすぐ隣りに石坂製粉所（詩人竹中郁の生家）があつた。湊川寄りには南画家水越松南の家があつた。私の記憶では湊川新開地はその創世紀にあつた。もちろん聚楽館は建つてなかつたが、相生町から移ってきたので、その名をとどめている相生座はあつた。その正面には電気館、日本館という映画館はあつた。みな河原のあとに建つたものである。私が活動写真（映画の旧名）をはじめて見たのはこの常設館においてである。日本館だつたと憶えているが、そこで四谷怪談をみたが、文字どおりのスリラーだつた。その夜は恐怖のあまりおちおち眠れなかつた。

新開地の堤防の跡は通称「どて」とよばれていた。「どて」には老松がたちならんでいた。風があると松並木の枝葉が鳴つた。少年の私の耳には、ここで倒れた正成の将兵（つはもの）たちのあげる咽び声のようにきこえた。神戸では「なんこうさん」と尊崇と愛情をこめた言葉をもつてよばれている湊川神社は、旧湊川から東え数丁のところにあつた。神戸駅のすぐ北にあり、国道に面しているこの神社の境内は広々していた。楠氏の旗印であつた菊水の紋どころのついた瓦で葺いた神垣（かき）をめぐらしていた。大きな楠（くす）の

き）の古木が神垣（かき）ごしにみられた。正門をくぐつて右におれると「嗚呼忠臣楠氏之墓」と碑にきざまれた墓がある。水戸光圀（黄門）の建てたものである。湊川神社のすぐ裏手に小高い丘になっている大倉山があるが、山腹に広嚴寺という寺がある。湊川で敗れた正成が最後まで生残った一族十六人とともにこの寺でいさぎよく切腹して果てたと伝えられている。

私は、毎日のように湊川の河原に遊びに行つたが、神社には、お祭のあるときでもなければ、めったに行くことはなかつた。河原を越えると、他国に足をふみ入れるような感があった。それだけでなく、私は小供のころから神社やお寺の雰囲気には何となく反発さえおぼえた。自由奔放な童心には、窮くつて抑えつけられるような気がしてならなかつた。私は英雄楠正成獅子奮迅の血戦ぶりを硬苦しい神社の建物のなかで想像するよりも、湊川河原のながめのなかで松籬をききながら私なりに空想をたくましくするのが好きだった。手兵僅か七百騎をもつて、尊氏三万の大軍を迎えて討つ楠勢の奮戦の図を、少年雑誌の挿絵や絵草紙をとおして好んで胸にえがくのだった。

少年期における正成崇拜は、私の精神形成の上では宿命的な影響をもつたと私はゆづと考える。天皇えの誠忠といつた意味においてではない。衆寡敵せず、そのことの理を百も承知しながら、しかも一握りの兵をもつて雲霞（うんか）の大軍に立ちふさがつたというその感動が幼いころの戦の心をしっかりと抱えてしまったのである。私は今日なお人生ぎりぎりの場においては、少数者のモラルを信じて生きている。

（仏文學者）

元・松本 宏

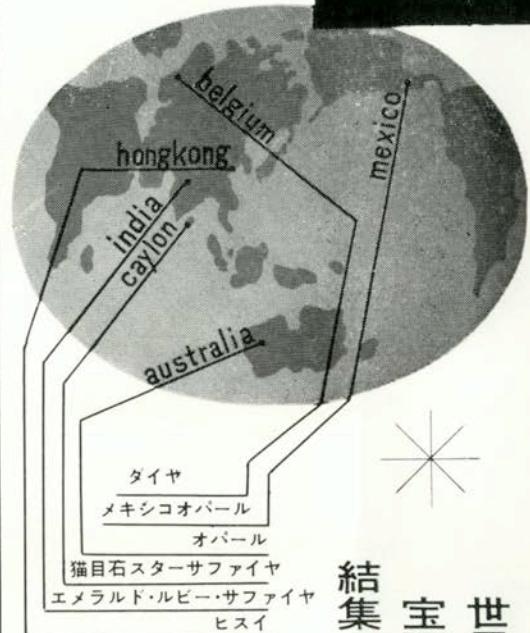


マロングラツセは ヒロタの銘菓

世界中の人からほめられた
日本の誇り 神戸のほまれ

元町通三丁目 TEL ③二二三四〇番

DIAMOND



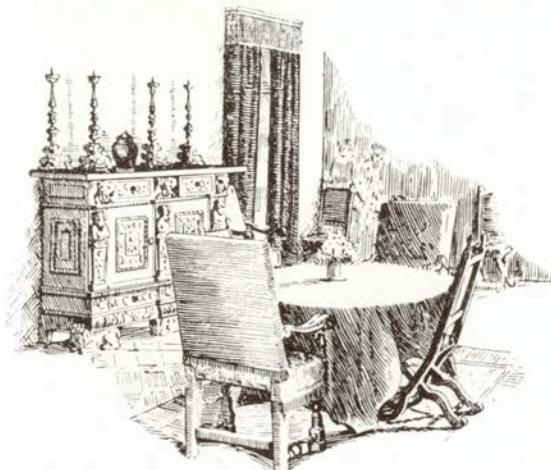
宝石輸入商・宝飾店

世界の
宝石を
結集した

タジマ

神戸・元町2丁目
TEL ③ 0387・2552

家具・室内装飾・工芸品



永田良介商店

大丸前 TEL { ③ 5 5 2 0
③ 1 2 9 0

冬よ

さようなら

上野純子

あたたかい春の訪れとともに、心なしか目にうつる緑の色がなんだか生き生きしてきたようです。

「冬きたりなば、春遠からじ」——、スラックスに皮コート、そして私の好きな赤とグリーンの格子シマのマフラーをつけ、冷めた六甲おろしにふるえながら、大阪や神戸のスケート・リンクに通つていた私も、大好きな「冬」をお別れです。スケートを始めてまる九年になる私にとって「冬」はわが愛する季節といえるでしよう。誰れもいなない早朝のスケート場で大好きなスクールやジャンプの練習をするのが私の冬の日課だった。毎日のトレーニングは厳しいけれど、氷の上で滑つてゐるときが、私にはいちばん「幸福」な瞬間だ。かつてイスやヨーロッパ各地のスケート・リンクで世界各國より抜きの選手たちと技をきそつたときの興奮がよび起さることもある。スケート靴をはき、氷上におりたつたときのあの得も知れぬ「緊張感」、滑つてゐる間は、もう無我夢中といつた感じはいつまでたつてもかわらない。そして滑べり終つたあとのこところよさ、はげしい練習のあとに湧いて出る汗とともに気持がいい。

どんなに寒い冬でも練習したあとは、ボカボカとまるで春のあたかさを感じさせてくれる。冷めたくホホに吹きつけるこがらしも練習後の私にはここちよい。だから人の嫌う冷めたい「冬」が大好きだ。

第一、氷とは切つても切れないスケートにあけくれしている私なんだもの……。

でもそんなに好きな「冬」ともさようなら。

いつの間にか春風がそよぐ季節がやつてきたのです。これからはスケート靴をはく回数もいくらか減るでしようが、来年の「冬」は、東京オリンピック目ざして再びはげしい練習を始めます。それだけにきっと待ちどおしい気持で「冬」をむかえることでしょう。

(スケート選手・関学大)

神戸 つ子 放談

神戸を見直そう

牛 尾 吉 朗

生田川の市電通りを南へ行ったところに「興進ビル」があり、四階は牛尾工業の新社屋である。社長の牛尾吉朗氏は36才、全く鋭氣颯爽として、青年実業家と呼ばれるにふさわしい人柄である。

新らしい神戸の担い手達として自覚しい活躍を続いている神戸青年会議所の代表者。

「神戸を見直そう」と熱心に話をされるところなど、イキのいい神戸つ子だと期待せずにはいられない、話も明るく楽しい――



(写真は郷土のために頑張ると語る牛尾社長)

神戸を明かるく

神戸は港都としては世界的だし、美しいですね。香港に似ていると云う人も多いようだけれども、北欧のコペンハーゲンの感じたな、ナボリにも似ているよ。いづれにしても世界の都市に決して負けませんよ。

だから神戸商工会議所・県・市を中心、「町を明かるくする運動」には大賛成です、これで神戸の夜が明かるくなれば一段と美しくなりますよ、欧州では自動車のヘッド・ライトをつけなくて夜の町を走るんですから、町は明かるいほどいいということです。

懲をいえば、神戸にアカデミカルな雰囲気がほしいと思うのは私だけではないと思うんですよ、当然これからの神戸の課題だとは誰しも考えてはいるんでしょうが、文化の中心点である区城とか、何か心のよりどころになるようなもの、それが交響楽団であっても、プロ球団でもいい、神戸の体匂のエネルギーとなるようなものがあれば町に活気が溢れて来ます。

神戸は国際色豊かな町だというのは事実なんですがそれだけに根強さというものが無いと言われるんですよ、いわゆる城下町的な愚直さというものは性格的に持ち合せていないんで、無理もないと云われればそれまで、私どもにとつては、そんな神戸を見直して行きたいという気持です。

神戸の狭隘さを乗り越えよう

青年会議所というのは、世界的な会合で年中行事に国際会議もあるんです、範囲は若手小壯経済人の集いで定年は40才なんです。

日本青年会議所は現在約一万人の会員を擁していて、それぞれの地域で活発に動いています、神戸青年会議所は一四〇人です。

毎月定例で、六甲山ホテルでゼミナーを開いたり、社会奉仕をしたりでいわば若手経済人のトレーニング（自己修練）の集いとして神戸を中心に経済、社会両面で、新らしい神戸の中心となるエリートとして成長して行くよう頑張りたいと思います。

幸い神戸の青年会議所は活気に満ち、一番発言しやすい会合になっていますね。

だから、出来るだけ他都市とも交流をもつて、神戸の代表選手としてはづかしくないようにやつてゆこうと張り切つてゐるんです。

神戸は国際性があるといわれているんですが、いわゆる地方都市的な狭隘さというのが顔を出して来て壁を作るようになる、これを乗り越えることが先決だと思いますよ。

かつて阪本知事が「神戸には財界がない」と云われたんですが、私たちにして見れば、神戸になぜ財界がないかということを考えてほしいと思いますよ。

神戸では経営者の会合でも非常に円満で、家庭的な雰囲気があるんです。

東京・大阪ではこの点非常に厳しさというより激しさがあり、魅力があるんです。そのかわり排他的なところはないし、ビジネスははかどるということなんだ。

私たち若い経済人もいま一度、じっくりと神戸を見直して、東京・大阪のよさを取り入れて、神戸の若さというものを創造して行きたいと思っています。

もつと大らかな気持で、郷土をいつそう豊かにするためにも、若い人を育てていただきたいと思います。

ただ神戸が住みよい町であるということだけではなく伸びる神戸として、ビジネスが出来るところにするよう努力して行きたいですよ、ビジネス街も現在の海岸通り附近はもちろん、イースト・キャンプ跡からもつと東までがビジネスの中心地にならなくてはいけないと思うんで頑張ります。

現在、イースト・キャンプ跡が停滞しているのも早急に神戸のためにどんどん解決して、新らしい神戸の拠点にあの辺がならねば嘘ですよ。私も若いんですからいまのうちに、後になつて悔いを残さないように郷土のため頑張ります。

（牛尾工業株式会社社長—神戸青年会議所代表者
(文責・小泉康夫)